

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 6月12日現在

機関番号：30108

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23652143

研究課題名（和文） 海外事業所への参与観察による英会話分析

研究課題名（英文） Research on English Use in Business Setting of Japanese Company Abroad through On-Site Investigation

研究代表者

坂部 俊行 (SAKABE TOSHIYUKI)

北海道工業大学・空間創造学部・教授

研究者番号：70337062

研究成果の概要（和文）：海外に進出している企業で、日常業務の英語使用の音声データを収集した。そのデータから、いろいろな傾向が見受けられた。加えて、数名の学生を対象に、海外インターンシップを実施し、彼らの音声データも収集し、その傾向、場面ごとの対処仕方、インターンシップの初めて最後での変化を分析した。これらのデータは、大学における英語教育の今後に活用使える英語の教育

研究成果の概要（英文）：The speaking data during daily routine within the offshore offices of Japanese companies was collected. Also, scenes at work sites were videotaped. A few tendencies can be perceived from the data. In addition to the data, some university students were taken to an overseas internship in Singapore. Their speaking data was also recorded. Using the data, tendencies of their English usage, including ways to deal with problems, changes of their English and attitudes before and after the internship were analyzed. This data can be used to aid in the education of English at universities in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育、ESP、異文化コミュニケーション、海外インターンシップ

1. 研究開始当初の背景

日本は少子高齢化に伴い、消費・生産に従事する人口の減少が著しい。そして、経済市場は急速に収縮しているため、経済圏をアジアに拡大し、海外市場を開拓する必要性に迫られている。

経済産業省と文部科学省が「産学人材パートナーシップ」を立ち上げていることからわかるように、グローバルに活躍できる人材育成は急務である。しかし、事実上の国際語である英語の重要性・必要性は強調されているが、その英語を仕事の現場で使えるようになるには、どうすればいいのかといくことは

明確化されていない。

ESPの観点から、ニーズ分析は十分に行われているが、何を教えるべきかの鍵となるジャンル分析やタスク分析は不十分であると言えるだろう。ESP関連の文献データベースであるJACET ESP Databaseで検索すると、全登録数1,103件中ジャンル分析に関わる文献は25件、タスク分析に関わる文献にいたっては0件である。

2. 研究の目的

本研究では、企業の海外事業所や店舗で参与観察することで、従来の研究ではあまり取

集されることのなかった産業界の会話資料を収集する。そして、ESPの手法に基づき、会話分析、さらには日常業務の言語タスクを解明する。どのような会話やタスクが、そのような業務、文脈の中で行われているのかを描き出す。そして、将来的には本研究で収集したデータを基に、教材と学習プログラムを作成し、研究協力企業の研修で活用する。また、問題点を精査した上で大学の英語教育に転用し、産学連携に基づく海外インターンシップ制度の構築と海外事業での有用な人材育成を目指す。

3. 研究の方法

海外企業との英語でのやり取りの文書データの提供など、既に研究に協力いただいている企業のシンガポールの店舗において、業務における会話データの収集を行った。具体的には、シンガポールの店舗、取引業者や工場での参与観察、業務の録画・録音と、網羅的に会話を収集した。

加えて、現地で従事している日本人スタッフにインタビューを行い、英語使用に関する様々な意見・経験・状況を聞きだした。

さらには、学生をシンガポールに引率し、現地の企業でインターンシップを実施した。業務時間中、学生達にはICレコーダーを装着してもらい、英語でのやり取りを録音した。

海外インターンシップに関しては、学生が希望する業種で、市場調査、営業などの業務を体験させた。学生が自分自身のコミュニケーション能力について、どのように感じているかは、3つの方法で確かめた。1) 研修前と研修後に、Common European Framework of Reference for Languages (CEFR)の日本版(CEFR-J)を使用し、「理解」、「話す」、「書く」の言語運用能力に関する自己評価がどのように変化するかを調べた。2) 研修中に、何を学び、何に失敗し、どのような英語表現を覚えたかを記録させ、会社の人とどの程度コミュニケーションが図られているかを観察した。3) 研修後に、自分自身のコミュニケーション能力の変化について記述させた。

4. 研究成果

シンガポールでの参与観察で収集したデータから、英語使用年数に関わらず、英語表現に関しては「phrasal, simple, short」、英文法に関しては、「simple」という傾向が見受けられた。英語使用年数における違いに関しては、長い従業員は、アクセントは現地に近く、話すスピードも速く、会話の継続性が見られた。その反面、英語使用年数の短い従業員の英語は、日本語アクセントであり、話すスピードはやや遅く、準備をしていない会話ではやや困難を感じていた。

これらのデータを分析してみると、大学に

おける英語教育では、質問や会話での受け答えにおいて、1) 短く平易な英語の表現を作成させる2) それら表現を的確に短時間でいくつも出せる練習をさせる、このような演習をすることにより、ある程度の英語コミュニケーションの円滑化を可能にすることができる。

また、別のデータである、学生達の海外インターンシップで課した、研修前と研修後のCEFR-Jおよび研修中そして研修後に提出させたレポートからも、様々なことが見える。

2012年に4名の学生を夏休みの2週間、シンガポールの会社でインターンをさせ、とりわけ、ビジネスパーソンの中で特に問題となる、発音・聞き取りに関して、どのように自己評価し、その状況をどのように捉えているのかを観察した。

インターンシップの前後で、1名だけは、Listeningスキルの向上が全くないと評価した。この学生は、聞き取りができないため、ほとんど対話が成立しなかった。残りの3名は、Listeningのスキルをある程度向上したと評価しており、ノーマルスピードの英語にはついていけない場面があるものの、Clearな発音であれば理解できるレベルと評価した。

レポートに示された内容を調べていくと、聞き取りができない1名は、聞き取りができなかったこと、そして自分自身の発音が通じなかったことのみをつづっている。一方、残りの3名は共通して、どのような英語が分からないのかを具体的に記述していた。その記述内容は以下の2点にまとめることができる。

- ・アメリカ英語、施設でのアナウンス、インフォメーションの英語は全般的に聞き取りやすい。しかし、フードコートや店員などの英語は概して聞き取りづらい。

- ・中華系、マレー系、インド系の英語は、スピードが速く、単語と単語の境目が聞き取りづらく、理解するのが難しい。ただし、日本語を話す人、ミャンマー人の英語は理解しやすいなど、人によって差異がある。

以上は、いわゆる、公共性の低い場面でのEFLスピーカーの聞き取りが困難とまとめることができ、その問題は、ビジネスパーソンが持つものと同じものである。

今回、特に注目したい点は、聞き取りが改善したと評価している3名は、個別の発音の問題について分析をしている点である。その分析は以下のようにまとめることができる。

- ・センテンスでは、主語が省略されることがあり、語尾に中国語が混ざることがある。

- ・単語は、中国語やマレー語が使われていることがある。k, d, t など発音されない音があるため、sadのような簡単な単語さえ理解できないことがある。

センテンス、単語の区別をしており、アメリカ英語のようなネイティブの英語とどのように違うのかを具体的に述べている。また、自己評価のレベルが大きく改善した学生の場合は、1) 早いと聞き取れない、2) 区切りが分からない、3) 単語と単語がくっついている、4) 発音していない単語がある、と分析の視点が段階的に細かくなっていた。

以上、聞き取りに関しては、分析的な視点の有無が聞き取りの改善につながっていることが分かる。

今回の研究で収集したデータは大変貴重なものであり、さらなる分析をすることにより、今後の英語教育に活かせるものである。一般的に書店に並んでいる英会話の書籍や、授業で教科書を通して教えられる英語とは異なり、実際の現場で使用されている生の英語使用状況を踏まえた教材そして教授法の作成・開発への糸口となり、英語を使える人材の輩出につながる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

坂部 俊行、内藤 永、山田 恵、三浦 寛子・Research on Linguistic Use in Both Business and Basic English through On-Site Investigation・The JACET International Convention Proceedings・査読有・2011・pp. 533-539

[学会発表] (計6件)

①坂部 俊行・Perceived Self-Efficacy in Usage of English through a Short-Term Overseas Internship・Association for Business Communication's 78th Annual Convention・2013年10月23日～26日・米国ルイジアナ州ニューオリンズ

②坂部 俊行・Requirements for Internship in Singapore-Perspectives from Sense of Purpose, Pre-Study, and CEFR-J・大学英語教育学会第52回国際大会・2013年8月31日・京都大学

③坂部 俊行・Challenging Exploratory Experiment: Improving Communication Skills through an Internship in Singapore・平成25年度工学教育研究講演会・2103年8月29日・新潟大学

④坂部 俊行・Research on English Use in Business Setting of Japanese Company Abroad through On-Site Investigation・Association for Business Communication's 77th Annual Convention・2012年10月25日・米国ハワイ州ホノルル

⑤坂部 俊行・Preliminary Research on Overseas Internship in Singapore・大学英

語教育学会第51回国際大会・2012年9月1日・愛知県立大学

[その他]

ホームページ等

<http://www.esp-hokkaido.org/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂部 俊行 (SAKABE TOSHIYUKI)

北海道工業大学・空間創造学部・准教授

研究者番号：70337062

(2) 研究分担者

内藤 永 (NAITO HISASHI)

北海学園大学・経営学部・教授

研究者番号：80281898

柴田 晶子 (SHIBATA AKIKO)

札幌大谷大学・社会学部・教授

研究者南郷：40289690

山田 恵 (YAMADA MEGUMI)

北海道薬科大学・薬学部・教授

研究者番号：40326559

竹村 雅史 (TAKEMURA MASASHI)

北星学園大学短期大学部・教授

研究者番号：60353215

三浦 寛子 (MIURA HIROKO)

北海道工業大学・未来デザイン学部・准教授

研究者番号：60347755